2年連続！矢板中央 全国第3位！

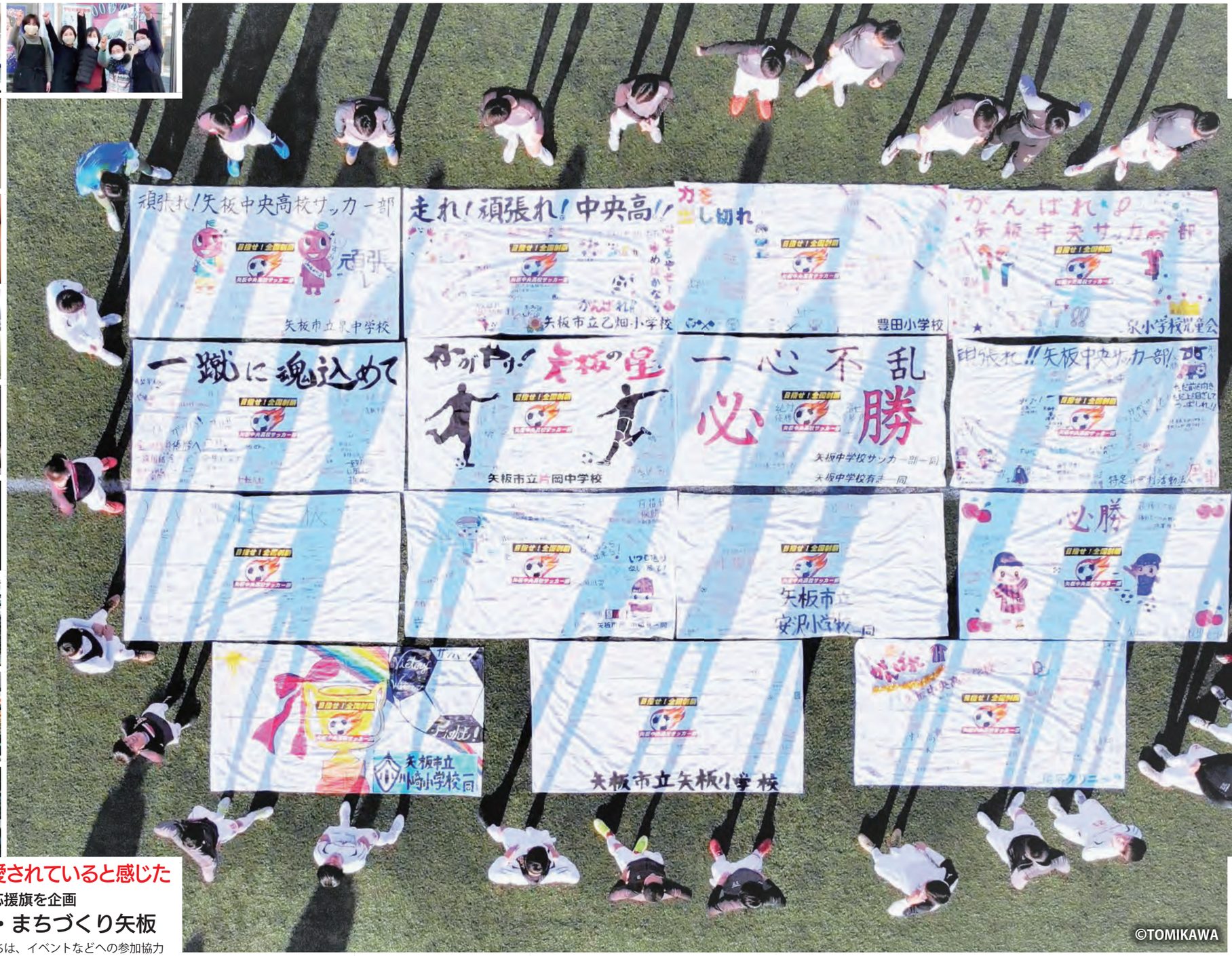
感動をありがとう！

今シーズン、コロナ禍でチームを取り巻く環境は激変した。練習量の絶対的不足、インターハイの中止で試合勘を磨く機会を失った。その環境でも彼らは、先輩から引き継いだ全国高校サッカー選手権大会への4年連続出場というプレッシャーを跳ね除け、全国の舞台へと勝ち進んだ。

しかし、大舞台にはいつもなら聞こえるはずの声援はない。だが彼らは地元から届けられた大きな声援に応え、大きく飛躍した。そして彼らの躍動した姿は、声援を送った側にもまた勇気を与えた。

いつもと違うからこそ気付けたこと…。それは、遠く離れていても心は一つになれる。

© バモ爺



©TOMIKAWA

チームが地域から愛されていると感じた

手作りの応援旗を企画

NPO 法人風車・まちづくり矢板

中央高サッカー部の生徒たちは、イベントなどへの参加協力をお願いすると快く引き受けてくれる、とても頼もしい存在です。

これまでは、チームが全国大会に出場するたび、会場に出向き直接声援を送っていました。今回それが叶わないならば、皆さんの声援を旗に載せ、選手に届けようと応援旗を送ることにしました。

市内小中学校や施設などの皆さんに作成をお願いしたところ、快く引き受けていただき、短期間にも関わらず、色使いやデザインなど工夫され、心が熱くなるメッセージがたくさん書かれた、とても素敵な応援旗を作ってくださいました。

寄せられた応援旗を見て、チームが矢板の地で根付き、そして愛されているのだと改めて実感しました。これからも矢板の誇りを胸に頑張ってもらえるよう、応援し続けたいと思います。

皆さんの熱い思いを届けたかった…

応援動画を企画製作

地域おこし協力隊員　渡辺　惠太

令和２年４月に協力隊員となってから、TAKIBI の活動の発信とそこに関わる人たちの取材を通じて、矢板市の魅力を伝える動画を作成して発信する活動をしてきました。

例年、全国大会の会場には多くの市民の方が応援に出向くと聞き、今回、一般入場が制限される中、なんとか声援を届けたいと思い応援動画を企画しました。

撮影を通して、多くの市民の方が中央高サッカー部の全国での活躍を誇りに思い、応援していることをひしひしと感じました。

試合前に、監督や選手がこの動画を見て鼓舞されたとの感想を聞き、撮影を快く引き受けてくださった皆さんの熱い思いを動画に載せ、チームの方たちに届けることができたことをうれしく思っています。

第 99 回全国高校サッカー選手権大会ダイジェスト

温かな声援に感謝、地域に恩返ししたい

応援動画は、試合前日の宿舎で見させていただきました。こんなにも多くの地域の方に応援されているのだと実感し、感謝の気持ちでいっぱいになりました。全国第 3 位という結果を残せたのも、地域の方たちの支えや声援があったからこそ。

自分たちは、全国の舞台で活躍することが、応援してくれている地域の方たちへの恩返しの 1 つだと思っている。第 2 のふるさとである矢板に、優勝トロフィーを持って帰ってくるという夢を後輩に託したい。

矢板中央高校サッカー部
坂本　龍汰　主将

さまざまな応援の形がチームを支えてくれた

いつもなら聞こえる大声援が聞こえないという環境で、選手たちはとても心細く感じたと思う。そのような厳しい環境の中、スタンドに子どもたちなどから送られた応援旗を見て、多くの方たちに声援を送られているように感じ、とても勇気づけられた。

市が行ってくれたクラウドファンディングでは、多くの方たちから温かい支援をいただいた。そのおかげで、選手たちが全国の舞台で、安心して戦うことができる環境づくりをすることができた。応援いただいた皆さんに感謝したい。

矢板中央高校サッカー部
髙橋　健二　監督

2 回戦　1 月2日　ニッパツ三ツ沢球技場

矢板中央 1 - 1 徳島市立（徳島）
PK 6-5

PK 戦で矢板中央の底力を見せつけた！

試合開始からロングスローやコーナーキックで得点機をつくり、前半 35 分、MF 升田の左コーナーキックに DF 小出が頭で合わせて先制点を奪った。守っては DF 島崎、DF 新倉の両センターバックらがゴール前をかためて相手シュートをゼロに抑えた。後半もロングボールなどから攻勢をかけ続けたが、徳島市立の巻き返しを受け、24 分に自陣深くで相手にボールを奪われると、パスをつながれ冷静にゴールに流し込まれた。その後は両チームとも得点を奪えずに PK 戦へ。PK 戦では 5 人目までお互い全員が決め、6 人目の相手キッカーを GK 藤井がコースを読んでセーブし、4 年連続で初戦突破を果たした。

3 回戦　1 月3日　等々力陸上競技場

矢板中央 0 - 0 東福岡（福岡）
PK 3-1

主導権握られるも「赤い壁」でゴールを死守

前半開始から素早いパスワークを武器とする東福岡に主導権を握られるも、ゴール前で人数をかけて失点を防ぐなど、驚異の粘りを見せた。攻撃では MF 升田や MF 大畑らがシュートを放ったが、ゴールネットを揺らすことはできなかった。後半も押し込まれる展開が続き、31 分にはゴール前で立て続けに決定的なシュートを浴びるも GK 藤井が懸命のセーブで防ぐなど、全員が高い集中力を維持し猛攻を無失点でしのぎ切った。お互いゴールネットを揺らせぬまま PK 戦に突入。PK 戦では 4 人中 3 人の成功に対し、東福岡の 2 人目を GK 藤井が好セーブすると、3、4 人目が連続で外して勝負が決した。

準々決勝　1 月5日　駒沢陸上競技場

矢板中央 2 - 0 富山第一（富山）

堅守から後半波に乗り試合を優勢にすすめる

堅守、セットプレーと持ち味が共通するチーム同士の激突。前半は相手のコーナーキックや迫力あるサイド突破から押される展開が続いたが、GK 藤井が好セーブを連発するなど落ち着いた対応を見せ無失点で切り抜けた。後半に入り 9 分、MF 星のロングボールに抜け出した MF 小川が巧みなトラップで相手 DF をかわし先制ゴールを決めると、全国大会初得点に力強く拳を突き上げ、雄たけびを上げた。25 分には DF 島崎のロングスローから波状攻撃を仕掛け、こぼれ球に反応した DF 新倉が追加点を挙げた。その後も前掛かりになった相手の隙をついてカウンターを仕掛けるなど積極的に攻め続け危なげなく逃げ切った。

準決勝　1 月9日　埼玉スタジアム2002

矢板中央 0 - 5 青森山田（青森）

静かな大舞台で、静かに悔し涙をこぼした…

新型コロナウイルス感染拡大防止のため完全無観客となった準決勝。相手は前回大会準優勝、全国屈指の強豪校である青森山田。試合は序盤から主導権を握られ、自陣内での攻防を強いられた。前半 16 分には右サイドを崩され先制されると、35 分には相手のロングスローから追加点を許した。前半終了間際に、MF 升田のフリーキックから相手ゴールに迫ったが得点することはできなかった。後半は開始早々、相手のサイド攻撃に耐えきれず 2 失点。29 分にも追加点を決められ、MF 小川を中心に攻勢に出たが、相手の早いプレスを前に相手ゴールを割ることはできず、念願の同校初の決勝進出は叶わなかった。